

知的障害特別支援学校の授業づくりに関する質的研究

－「ミドルリーダーの実践知の質的分析を通して」－

○遠藤貴則

(茨城大学大学院教育学研究科)

新井英靖

(茨城大学教育学部)

KEY WORDS: 実践知・質的研究・ミドルリーダー

1 目的

ベテラン教師の大量退職や複雑化する教育問題への対応への必要性からミドルリーダーの重要性が増してきている。その授業づくりの実践知、特に暗黙知としての側面に着目して、質的研究の方法を通して、その明確化を図り、継承することを目的とした。

2 方法

県内A特別支援学校教諭の中で知的障害教育の経験年数10年以上の教諭の中から優れた授業実践を行い、かつ自身の実践を省察し、言語化できる教諭5名を「ミドルリーダー」として選定し、半構造化インタビューにおける逐語録と授業参観及びVTR分析を行った。結果は、作成したフィールドノーツより収集された質的データとするためにM-GTAの方法を参考に概念化、カテゴリー化を行い、理論抽出を行った。実践知における指導観と指導実践の不可分性を考慮し、質的分析は個々の「ミドルリーダー」を対象に実施し、結果を全体考察としてまとめることで「ミドルリーダー」の実践知を考察した。

3 結果

(1)「授業の文脈化によって、課題と意欲を同時に生み出す」

N教諭は、生活単元学習における「携帯電話の架空請求への対応学習」や数学科における生徒自身が撮影した写真を飾るためにフレーム作りを通した「長さ」の学習という実践の中から、日常生活の中で、生徒自身が体験する必然性の中から学習内容を文脈化することで、学習内容と生徒自身の生活の連続性を確保しながら授業を構成した。また、その中に「知らない人からの電話」や「写真幅と一致しないフレーム」というように感覚的情動的な「違和感」を経験する場面を意図的に設定することで、授業での中心的な学習課題と課題解決に対する意欲を同時に発現させることで、学習を成立させていた。

(2)「協働から始まる役割を元に学習を展開させる」

F教諭は、国語・数学の合科的な認知学習において、準備や後片付けまで含めた「ボウリングをしよう」という文脈化された学習という実践の中から、学習の中に協働的側面を取り入れることで、生徒一人一人に役割を生み出し、その役割の遂行の中に学習課題を組み込むことで、学習課題への取り組みに対する必然性を生み出していた。また、学習を役割の遂行と位置づけて、周囲からの期待を生み出すことで、学習課題への取り組みと同時に、期待に応じたいという学習者としての主体性の形成を図りながら学習を成立させていた。

(3)「学習活動に学習者の主観性を取り入れる」

K教諭は、数学科の「金銭」の学習において、家庭でのお手伝いの内容に応じた適切な対価としての「お駄賃」を考える学習や国語科のテーマに応じた内容を相手に分かりやすく伝える学習において、テーマ設定を生徒自身の話し合い活動で決定する学習という実践を行った。客観的な教

科学習の内容の中に、生徒一人一人の日常生活経験を基盤とした主観的な要素を取り入れて、授業を構成していた。また、授業場面においても、生徒のつぶやきを取り上げ、他の生徒も含め全員で共有化する支援を行うことで、実際の相互作用を通して、主観的な要素を積極的に授業に取り込んでいた。主観的な要素を取り込むことで、学習課題に対する意欲を生み出し、生徒による試行錯誤による課題解決を促進するようにしていた。

(4)「指導性を状況化して、多様な学習を展開させる」

M教諭は、学習を潜在力の発現と捉え、授業において重要なことは、潜在力の発現の多様性の確保であると捉えていた。そのような指導観の元で、国語科のお弁当作りの文脈における平仮名の学習の振り返りの場面において「今日のおすすめのおかずの紹介」という場面を設定し、授業での学習課題を児童自身が、自身の主観性の中に位置づけながら、発表することで、多様な学習過程を生み出すようにしていた。また、多様な学習過程を生成するために、教師は、相互作用を重視し、その促進のために意図的に指導性を「状況化」して、授業文脈における「語り部」としての役割を中心に機能するようにしていた。

(5)「多様な問題提起を通して、学習者に問いを生み出す」

A教諭は、学習を人や物との相互作用を通して形成される既知の経験と新規知識のネットワークとして捉えていた。そして、ネットワーク形成の契機を児童自身の「問い」であるとし、教師の発問やかかわり方を問題の提起を中心にするすることで、児童が「問い」を生み出し続けるようにすることで「問い続ける」学習者の姿勢の育成を図っていた。算数科の量の比較の学習の場面においても、事前に準備したボールやテープの比較から、徐々に教室内の物を臨機応変に教材化することで、学習の拡張性を生み出すような実践となっていた。そして、学習成果の評価に関しても、課題に対する正誤よりも「問い」を生み出し続ける姿勢の育成の視点を重視していた。

4 考察

ミドルリーダーは、学習に「身体」「情動」「イメージ」といった「周辺的な要素」を取り入れることで、中心的な学習課題の「周辺的な要素」同士の結びつきや重なり合いが生まれるように授業を構成している。また、「周辺的な要素」の結びつきや重なり合いを促進すると考えた。教師の指導性を「状況化」することで、教材を媒介とした教師と学習者との相互作用を活性化して、活用力のある豊かな概念形成を図っているのではないかと考えた。

(文献)

畑中大路(2010)ミドルリーダーの研究の現状と課題
石田真理子(2015)実践知の継承ミドルリーダー教員の資質能力
香川秀太(2011)状況論の拡大:状況的学習,文脈横断,そして共同体間の「境界」を問う議論へ Cognitive Studies 18 604-622